

室町期歌会資料集成稿―積文と略解題―(二)

石澤一志・酒井茂幸
武井和人・日高愛子

【緒言】

小論は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図とした。

今回の小論では、宮内庁書陵部図書寮文庫に所蔵される以下の歌会資料二点を選び、積文を掲げ、併せて略解題も付した。

〔1〕応永十九年正月十八日広橋家月次始歌会

底本Ⅱ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁裏御会和歌』（五〇一・八〇六）

〔2〕応永十九年十二月九日仙洞三席御会

底本Ⅱ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『詩誦晴御会』（二一〇・七一五）

〔2〕は既に、『大日本史料』第七編之十七（底本Ⅱ高松宮本）、『後小松天皇実録』（底本未詳）に積文がある。そこで、小論では、現在知られる三伝本及び二種の積文をも対校し、校本として掲げることとした。

略解題末尾に当該歌会資料の積文・略解題の礎稿作成者を（ ）に入れ示した。ただし内容に関しては、著者相互に検討してゐる。

積文・校異作成にあたり、以下の方針に従った。

(1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2) 丁移りを、「一・」一一、の如く示した。

(3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

(4) 評語等の小字は、「」に入れてこれを示した場合がある。

(5) 漢文には試みに句読点を付した。

(6) 和歌は原則として一行書に統一した。ただし散らし書き等の場合は、出来るだけ底本の原形を保存した。

各底本の書誌は、略解題を参照されたい。

小論は、JSPS 科研費二六三七〇二〇〇の助成を受けたものである。

（武井和人）

1 応永十九年正月十八日広橋家月次始歌会

〔底〕本Ⅱ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁裏御会和歌』（五〇一・八〇六）所収本

校合本Ⅱ国立公文書館内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』（二二七・一一）第五所収本

【釈文】

「禁裏御会和歌（正）脉肝（九）当座」（外題〔題簽〕）

*

応永十九年正月十八日月次会

応永十九年正月十八日当座

薄様之御懷紙并并当座短尺之内

内裏 御製相交者也

兼日当座題共以一位大納言（重光卿）出之

紅薄様 文松 御製也

ときわにもすき

たる千代の色

なれや

みとりわかた

つ

松のひと

しほ

詠松有春色 和歌

性光」一

【底】

【内】

* 【内】「応永十九年（正）野家会和歌」（端作題）

和歌のうらや又ち
きりある春のいろも
いまこそみゆれ千代の
松か枝

詠松有春色

倭歌

大納言重光

浅みとり松をふか
めて見ゆるかなよも
の木のめもはるの
一しほ

詠松有春色

和歌

権大納言兼宣

さしのほるくもぬも
ちかき松か枝に千代「二
へんはるの色そ見
えけり

詠松有春色和歌

祐恒

春をへていろそふ

松のみとりこそ千
代へん君かかさしな
りけれ

詠松有春色和歌

宋雅

十かへりの花の
みやこの春にこそ
千代へむ松のいろ
は見えけれ

民部卿為尹

端作同
いく千代のはるのみとりを猶そへん
竹園ふにあひをひのまつ」三
此横紙端作同雲客
春日同詠松有春色

和歌

権中納言豊房

みとりそふまつのみさほの一しほに
春も千とせの色やみゆらん

詠松有春色和歌

権中納言宗量

いく千代かかはらぬ松のことの葉も
なを色まさる春にあふらむ

参議左近中将満親

*【内】竹の園ふに

いく千代のやとのかさし同その春は
わきて色そふ庭の松か枝

常永

とき同わなる色にも春はしる者と
見えてみとりそ松にたちそふ

佐大弁有光

ときはなる松にも千世の色そへて同
行すゑとをき春はみえけり「四

宗傑

君か代同の春にあひおひの色みえて
みとりさしそふやとのわか松

右兵衛督基親

色同まさる松のみとりの一しほや
君か八千世の春にあふらん

従三位経良

すゑ同とをき軒端の松のみとりより
千代と春との色やみすらむ

従三位長遠

千代同ふへき春のみとりの一しほも
木たかく見ゆる庭の松かえ

以下俗中端作同之
春日同詠松有春色和歌

右大弁清長

わかみとりさしそふ枝に春見えて

*【内】「同」ナシ

よろつ世しるき松の色かな

左中将尹賢

春の日のあまつ枝にさすわかみとり
松のこゝろやのとかなるらん」五

散(マ) 位為盛

この春のわか木の松のひとしほに
やとのめくみもそひてみえつゝ

左中将雅清

わきてこの春はめくみの色そへて
木たかき松の千世やみゆらん

内蔵頭教豊

千代もなをかきらぬやとの松かえは
いくとせ春の色をそへまし

右兵衛佐藤光

千とせともかきらぬ御代の春みえて
みとりさしそふやとの松かえ

左少将資雅

春にあふめくみしれとや松かえの
みとりも千世の色をそふらむ

左衛門佐盛光

一しほのみとりさしそふ松か枝に
千とせの春の色や見ゆらむ

法(マ) 橋重継

千代のかげ木たかき松や春ことの」六

みとりの色もさらにそふらむ

法マコ 橋範舜

いくしほそ千世をかさぬる春の色も

みとりにあまる庭のまつか枝

(五行分空白)

立春氷 豊なる年の始としらせつゝ まつみそなはず氷様かな

初春霞 春きぬと霞の衣けさよりや 四方の山路を立かくすらん

雪中若菜 ふる雪を猶うちはらふ里人の 袖にひまなく若菜をそつむ

初鶯 雪はまたふるすなからの谷のとに けさきゝそむるうくひすのこゑ

簷梅 とめきつゝ人もこそとへ梅かゝを よそにはさそへ軒の春風

門柳 しら露の玉のをななき青柳の いとや老せぬ門にみゆらん

帰雁知春 雪きゆるころとしりてやあまつ雁 こし路の空になをいそくらん

二月余寒 うすくたつ霞の衣二月の 空より風やさえかへるらむ

故郷春月 いまは又いとほぬ軒の板まかな 月はかはらぬ古郷の春

夜春雨 さ夜更て音ものとかに春雨の ふりいつる程やゆめをのこさん

春日遅 くれてゆく色に日影はかすめとも また程とをき山の端の空

尋花 いささらはよし野の山のおくにて とき世の外の花をたつねん

見花 おもかけの有明の空を契かな 見すつる花の木ゝの夕くれ

翫花 みてすきし花をいく木とかそへても あかすやまよふ山路なるらん

折花 ちらさしと山路の桜おりてゆく 心もしらす春風そふく

惜花 さのみ又風のとかにはなさしとや おしめとてこそ花はちるらめ

三月三日 花の色にいやうつろひて諸人の 酔をすゝむる桃のさかつき

款冬 かけうつす水に蛙のよもなかし 山吹の瀬のくちなし色の花

祐恒

資雅

清長

性光七

宋雅

経良

基一

兼宣

有光

尹賢

重光

為盛

基一八

宗傑

長遠

兼宣

*【内】基親

松間藤	松かえにさきてかゝれる藤波は	花や千とせの色にみゆらん	範舜
三月尽夕	ともにけふくれ行春とおもふより	猶きゝわふるかねのこゑかな	満親
卯花似月	むは玉の夢路にさかぬ卯花も	やみのうつゝの月とみえつゝ	
待郭公	世にふりぬ身にやつれなき時鳥	こゝろもしらす猶やまたまし	性光
寢覚郭公	いく声かはやなきぬらん郭公	ねさめよりこそきゝはしめけれ	重光
五月郭公	声たにもさたかにそなき五月雨の	雲まをすくる山ほとゝきす	教豊
庵五月雨	いとゝしく露をもわかぬ程なれや	草のいほりの五月雨の比	豊房「九
夏草露	夏草のしけみかくれもをく露は	秋にやかすはまさらさるらむ	常永
里蚩	たか里とさたかにはなき夕やみも	ひかりにみえてゆくほたる哉	藤光
夜川篝火	大井河いまや鶺鴒のくたりやみ	瀬とにみたるゝ篝火の影	為尹
遠夕立	山めくる程そとみえてこなたまて	くもりをよはぬ夕立の空	為尹
樹陰納涼	風は猶ふかぬたえまも立よれば	ならのひろ葉の陰そすゝしき	重継
初秋風	みそきせし袖の名残の川風や	秋の日なみを今朝はかくらん	
初秋露	ほにはまた出ぬおはなも打なひき	露のよすかに秋やきぬらむ	範舜
七夕後朝	さためなき契はまつもなくさむに	ほしあひあくる空いかにせん	常永
秋夕	風の音も身にしむよりや夕暮の	秋をはうしとおもひそめけむ	為盛
夜萩	かせのをとは雨ときけとも窓ちかき	月にさはらぬ庭の萩はら	常永「一〇
朝萩	朝またき露吹むすふ萩かえの	花にみたれてのこる秋かせ	基一
夕薄	吹すくる風の跡よりいとすゝき	みたれてむすふ野への夕露	清長
山初雁	程もなく幾重の山を越ぬらん	けさはみやこの初かりの声	祐恒
田家鹿	秋の田のかりにむすひしいほまでも	いく夜かなるゝさほしかのこゑ	藤光
野亭聞虫	草のいほまかきも野へもひとつにて	枕へたてぬ虫のこゑかな	性光
嶺月	入ぬへき峯をおもへは山よりは	いそかて月を猶やまたまし	長遠
谷月	なかき夜もはるかに月や深ぬらん	谷のとほそに影のさしいる	

海月	なかき夜のかきりもしらす明石かた	波の千里にのこる月かけ	宗傑
湖月	御わたりは秋もあるかとすわの海の	氷をしける月のかけかな	重光
関月	関の名をさても清見といはさりし	むかしもかくや月はすみけん	兼宣「一
擣衣響風	秋風の吹たひことにきこゆるは	きぬたやとをき里にうつらん	満親
紅葉増雨	しつえまでもる程しれと村時雨	すくれはふかき峯のみちは	雅清
紅葉映日	をく霜も露となりてや朝日影	うつる紅葉は色まさるらん	宋雅
暮秋露	風さむみ秋もすゑ葉のゆふ露に	いとゝしほるゝ野へのあさちふ	資雅
惜九月尽	いかゝせむけふさへはやくくれはとり	あやなくおしき秋の日数を	有光
初冬時雨	堪さりし秋の梢はさもあらはあれ	袖色みするけさの時雨に	
風前落葉	時雨より猶さためなき山風に	一かたならすちるもみちかな	宋雅
庭霜	朝ほらけ庭のかれふに花さくと	みゆるはかりにをける霜かな	性光
冬月	さゆる夜の月に雪けの雲みえて	いまより影やおほるなるらん	宋雅
古屋霰	軒の苔板まのうへにふりためて	あまる霰そ庭にすくなき	為尹
暁千鳥	かもめなくあか月かたの落しほに	ましりてさはくむら千鳥かな	重光
池氷	池水のなかれの末もよとむまで	こほれは波の音そきこえぬ	祐恒
常盤木雪	神山や峯の榊の枝ことに	ゆふかけそへてふれる白雪	盛光
深雪	今朝まてはつれなく聞し風の音も	はやうつもるゝ松のしら雪	教豊
歳暮雪	春ちかきしるしに雪は下きえて	日かすはかりのつもるとしなみ	経良
寄雲恋	心にもかけて猶きくゆふへかな	雲路の末の入あひのこゑ	
寄風恋	人しれすむすひし露の契より	なを吹やまぬくすのうら風	藤光
寄雨恋	さためをく雨夜の人のしなゝは	わきていつれに心とむらん	重光
寄月恋	見るまゝにわれのみ月にあくかれて	人もやとふとたのむ夜半かな	満親
寄煙恋	しらせはやもしほの煙下にのみ	くゆるおもひののこる恨を	豊房「一三
寄山恋	よそにこそしのふときゝし山の名を	わかわけわひてまよふ比かな	清長

*【内】しれて

寄杜恋	うき思ひしのたのもりの千えよりも しけきを袖の涙にそしる	重継
寄関恋	人はいさ我はなこそその関の名も しらぬになとかつれなかるらん	為盛
寄海恋	心あるよるへの波をよさのうみや なにへたつらんあまのはしたて	有光
寄橋恋	しはしなるとたえとたにもいはぬまで はるかにとひしまゝのつき橋	尹賢
寄埋木恋	いつのまにしのふ思ひの色に出て 世にむもれ木の名にはたつらん	長遠
寄塩木恋	山遠みはこふ塩木のくるしさも おもひのけふりそれとたに見よ	常永
寄宿木恋	つれもなきゆくゑそ色もかはりける 松とはしらぬつたのもみち葉	為尹
寄朽木恋	宮木ひくいつみの柚のそま人は いつゆきあひのちきりならまし	雅清「一四
寄初草恋	よそにちる心の花はをのつから そはて朽木の名にやたつらん	宋雅
寄忍草恋	いかにをく露ともいまたしら雪の 下もえゆるせ野への初草	経良
寄思草恋	さらはなと人もしのふの草ならて 我にはたつるうき名なるらん	性光
寄下草恋	いつまてか思ひしほれて言の葉の 色にも出ぬ露のした草	雅清
暁眠易覚	我ならぬ千里のほかの枕まで ねさめせさらむ夜の気色かは	
窓灯	いたつらにかゝけつくさて残るかな あけぬる後の窓の灯	兼宣
名所松	これも又神やうへけん和歌のうらの たねとしなれる松のことの葉	雅清
名所浦	いく千代か和歌の浦はの玉をのみ あつめてやとの月にみかゝん	兼宣
名所鶴	高砂の松の嵐もさ夜更て おのへに遠きたつの諸声	盛光
野風	たかねよりましはを払ふ風の音や ふもとの野辺に又かはるらん	資雅「一五
橋雨	かきくるゝ一むらさめは山かせに 川をとのころうちの橋もと	為尹
渡船	わたしもりとふへきかたもみえわかす また明やらぬよとの川舟	豊房
旅行	武蔵野や猶ゆく末もはる／＼と あさ露分ていそく旅人	盛光
旅宿	すそ野なる草引むすふ枕まで けさわけかねし山風そふく	範舜
旅泊	いそやかた夢路へたてゝよひ／＼の 枕にちかき浪の関もり	為盛

山家路 夕日さす峯のいほりの通路や 松の木すゑの里をわくらん

〔山家〕^{*}鳥 山かけの軒の木末の朝戸あけに ねくらをいつる鳥の一つれ

田家煙 あせかよふ道よりほそくたなひくや おき田の庵の煙なるらん

独述懐 みな人の花そめ衣いろそへは 苔の袖をも春のとへかし

老後懐旧 花鳥のすさみならては老か身に むかしわするゝなくさめもなし

往事〔如夢〕 山人にとひてやしらむおのゝえの くちしも夢にありやなしやと

〔釈教〕 たのむかな心の雲よ胸の月に おほはてみする風のたよりを

〔祝言〕 「」とせとかきらん物かわか君の 「」すゑとをき御代のめくみは

(四行分空白)

此一卷広橋大納言兼宣家会寄

書也而 金吾將軍就予令求

模写給仍心 嚴命忽染禿

(以下蠹蝕跡ヲ模写ス〔後掲図版参照〕) 一七

重光

尹賢

為尹

常永

宗傑 一六

宋雅

性光

祐恒

* 「」、【底】蠹蝕跡ヲ模写ス。今試ミニ同組題ト

推シウル『為家一夜百首』(新編国歌大観本) ニヨ

リ補ス。以下同。【内】蠹蝕不見

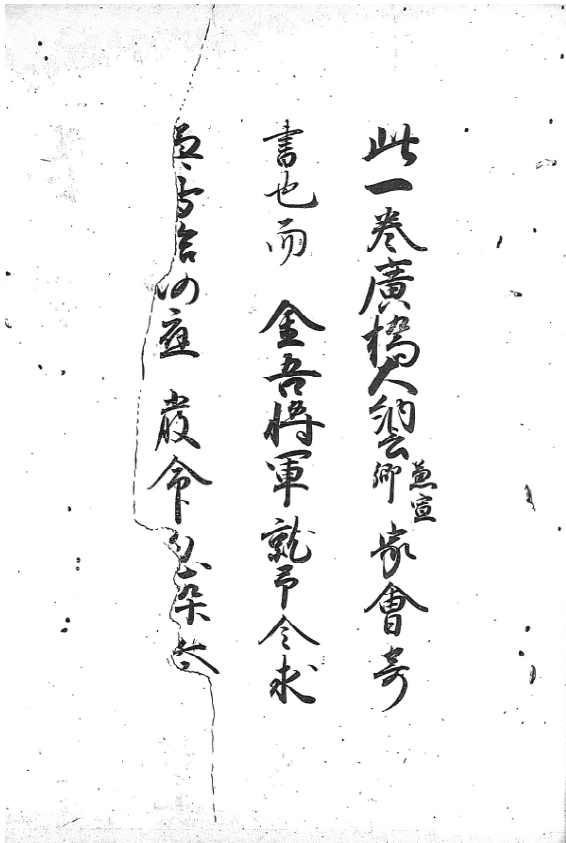
* 【内】往時蠹蝕 * 【底】蠹蝕跡ヲ模写ス

* 【内】蠹蝕

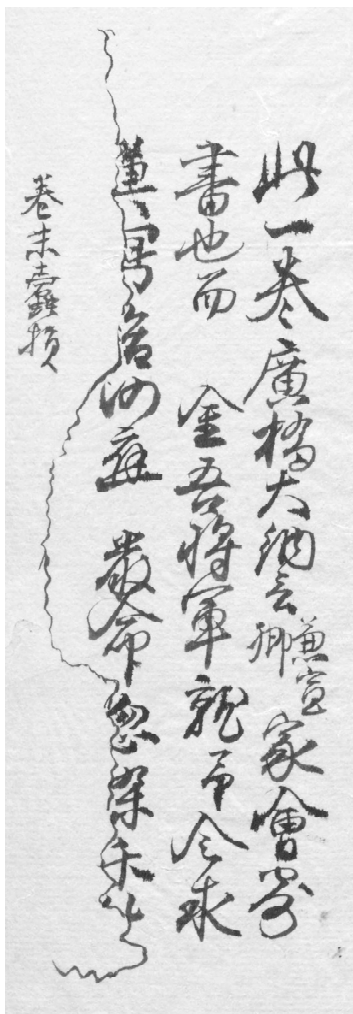
* 【内】蠹蝕 * 【底】蠹蝕跡ヲ模写ス

図版参照)

* 【内】蠹蝕跡ヲ模写シ、「卷末蠹蝕」トス(後掲



【底本末尾蠹蝕跡模写部分】



【内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』所収本末尾蠹蝕跡模写部分】

【略解題】

初めに書誌を記す。底本は、宮内庁書陵部蔵 五〇一―八〇六。御所本。写本一冊、袋綴。大きさは、縦二八・二、横二〇・九糎。薄緑色地。市松模様刷の紙表紙、左端に押八双あり。外題は、生成色地龍門料紙の小短冊題簽（縦一七・七、横三・四糎）を表紙左肩に貼り「禁裏御会和歌」 応永十九年正月月次当座」と墨書する。本文料紙は楮打紙、見返しは本文共紙。丁数は、一九丁で遊紙が前後各一丁、よって墨付は一七丁。書写内容は、歌会の和歌を懐紙の書式のまま転写したもの（二才く四才、字高は端作が約二三・〇、和歌約一九・五糎）、和歌を一首二行書きで列挙したところ（四ウく八才、字高約二三・五糎）、和歌一首を二行書きにしつつ、題を歌頭に、作者名を脚部に記するもの（短冊の形式を模して写した部分、約二三・〇糎）の三種から成る。奥書は、親本に於いて一部欠損していたと思われるが、それをそのまま忠実に模写する。外題の筆者は未詳だが、靈元院か。書写年代は、カード目録に「江戸初期写」とあるが、今少し下った、江戸時代前期の書写か。

猶、他にもう一本、国立公文書館内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』（二一七一―二一七二）に所収本が知られている。こちらも略書誌を示せば、縦二四・〇、横一六・五糎。無地茶地無紋紙表紙の左肩に楮紙素紙題簽を貼付「賜蘆拾葉 五」と墨書。丁数は一二三丁、遊紙が前一丁のみ、よって墨付きは一二二丁。同本には「三体和歌」以下、一六種の和歌作品が合写されるが、本書はその十一番目で、内題は「応永十九年唐橋家会和歌」と記す。七八丁才から九五ウまでの一七丁分に書写されているところは底本と全く一致する。しかし奥書部分を含めた後半部分の破損した状態をそのまま模写したところは、若干の相違が見られ、本文的にもわずかな

がら異同も見られるため、それらは校異として示した。書写年代は江戸の後期、筆跡は『賜蘆拾葉』の編者、新見正路（一七九一―一八四八）のそれである。

本作品は、応永十九年（一四一二）正月十八日、称光天皇に譲位後の後小松院が行ったもので、月次始の会である。場所は後小松院仮御所であった東洞院御所、性光（日野資教）邸と推測される。出題は日野重光によることが本文の注記から知られ、以下兼題の懐紙並びに当座の短冊（尺）による詠歌が、それぞれの形態を模して書写されている。作者は、後小松院・性光（資教法名）・重光・兼宣・祐恒・宋雅・為尹・豊房・宗量・満親・常永・有光・宗傑・基親・経良・長遠・清長・尹賢・為盛・雅清・教豊・藤光・資雅・盛光・重継・範舜、の二六名。それらの家名（本姓）、生没年、極位・極官等は以下の通り。

性光：日野（藤原）資教法名。一三五六一―一四二八、七三。従一位准大臣。

重光：日野・裏松（藤原）。一三七〇―一四二三、四四。従一位贈左大臣。

兼宣：広橋（藤原）。一三六六一―一四二九、六四。従一位贈内大臣。
祐恒：日野西（藤原）資国法名。一三六五―一四二八、六四。正三位贈准大臣。

宋雅：飛鳥井（藤原）雅縁法名。一三五八―一四二八、七一。従二位権大納言。

為尹：冷泉（藤原）。一三六一―一四一七、五七。正二位権大納言。
豊房：万里小路（藤原）。生没年未詳、一四二〇出家、従二位権中納言。
宗量：松木（藤原）。のち宗宣。一三七二―一四二九、五八で存。従

二位権中納言。

満親…中山(藤原)。一三七一一一四二二、五一。正二位権大納言。

常永…高倉(藤原)のち永行。生年未詳一一四一六。正三位参議。

有光…日野(藤原)。一三八七一一四四三、五七。従一位権大納言。

宗傑…紀俊長。生没年未詳。従三位侍従。

基親…持明院(藤原)。生年未詳一一四一九。正三位右兵衛督。

経良…田向(源)。生没年未詳、従二位参議。

長遠…東坊城(菅原)。一三六五一一四二二、五八。正二位参議。

清長…甘露寺(藤原)。一三八一一一四一四、三四。従三位権中納言。

尹賢…月輪(藤原)のち基賢。生没年未詳。従三位参議。

為盛…八条、法性寺。(藤原)。一三六六一一四四三、七八で存。正三位右衛門督。

雅清…飛鳥井(藤原)のち雅世。一三九〇一一四五二、六三。正二位権中納言。

位権中納言。

教豊…山科(藤原)のち家豊。生年未詳一一四三一。正三位参議。

藤光…町(藤光)のち資広。一三九〇一一四六九、八〇。従一位権大納言。

大納言。

資雅…白川(源)。生没年未詳。四位左中将。

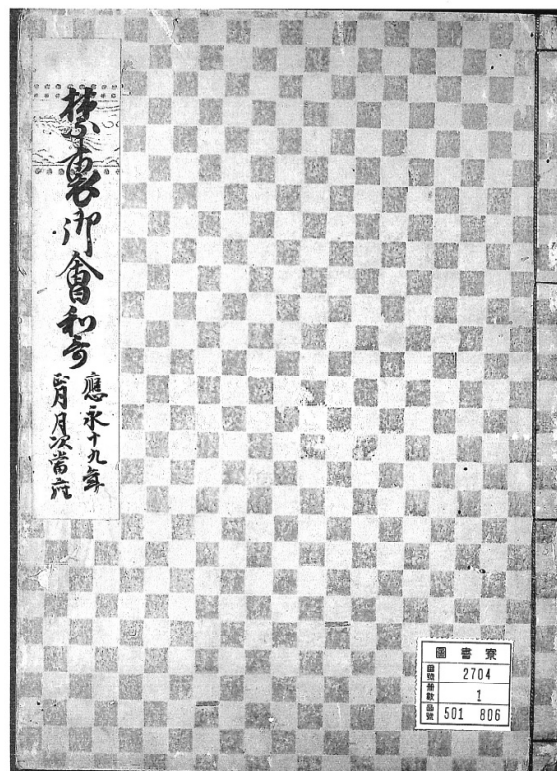
盛光…日野西(藤原)のち。国盛。生年未詳一一四四九。正二位権大納言。

重継…山科教言記・応永一三年閏六月一日条、八月四日条等に「按察房」同年一月三日条に「富小路重継法眼」と見えるのが、

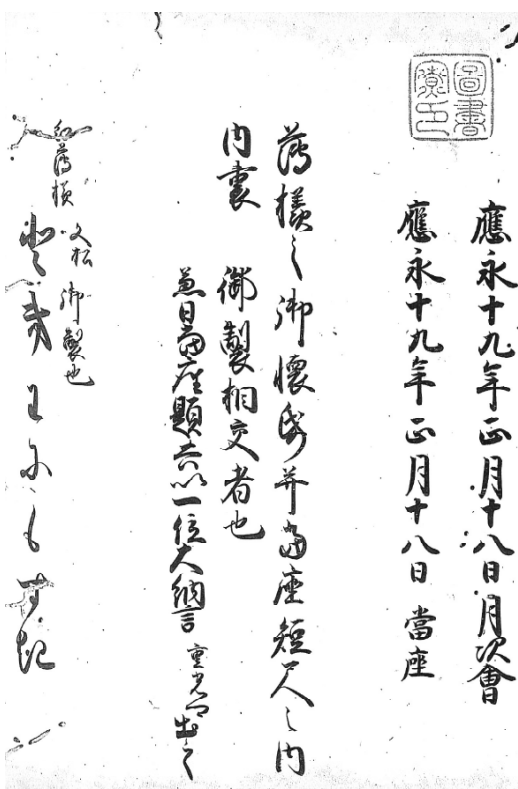
該当する。猶、伝未詳。

範舜…山科教言記・山科家礼記等に散見、応永一四年一月一五日条

に「高橋範舜法橋」として出てきており、「高橋」と称される。教言の許にしばしば来宿しており、山科家の縁者であろうか。猶、伝未詳。(釈文Ⅱ石澤・日高、略解題Ⅱ石澤)



【底本前表紙】



【底本巻頭】

2 応永十九年十二月九日仙洞三席御会

〔底〕本Ⅱ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『詩詞晴御会』(二一〇・七一五) 所収本

校合本Ⅱ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『詩歌晴御会』(二一〇・七五二) 所収本

国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『応永十九年十二月御会詩歌』(H一六〇〇一三三八) 所収本

『大日本史料』第七編之十七所掲本 ※底本【高】

『後小松天皇実録』所掲「応永十九年十二月御会詩歌」本 ※底本未詳

〔底〕
〔書〕
〔高〕
〔史〕
〔小〕

【釈文】

詩詞晴御会 応永十九 (外題〔題簽〕)

① 皇製詩一首擬

從三位行大藏卿臣菅原朝臣

夫詩者、王化歸正之基也、人倫秉彝之道也、有近

有遠、十□国^③之民教可知、無僻無邪、三百篇之

聖刪斯著、寔是周情孔思、不足嗟嘆詠歌

者歟、^④ 太上天皇、惠澤洽而敷八埏、^⑤

而育群品、功参造化、徳礼乾坤、昨^⑥

宸臨尊位兮合日月之高明、今卜姑射^⑦

愛山水之勝絶、雖寄趣向於恬淡、未^⑧

諮詢、是以、屢因繁機之寸暇、新催雅席^⑨

睿藻之揮宝翰、自留翔鸞之勢、妙曲^⑩

乍致鳴鳳之祥、侍座者調鼎秉鈞之良弼^⑪

克備焉、^⑫ 製者碎金積玉之逸才也、^⑬

矣、方今、備^竹。猗々連千竿之碧、清陰寔^⑭

【校異】

①【史】作

②「秉彝」、【底・書・高】字形微妙ニ異ナルモ、【史】釈文及ビ文意ニ從ヘリ

③【底・書・高】蠹蝕跡ヲ模写ス

④【史】空白ナシ

⑤【底】行末マデノ三文字分余空白、【史】□□□。以下空白ハ原本の破損(第一

一丁表左下・同右下における)ナラム。

⑥【底】行末マデノ四文字分余空白、【史】

⑦【底】行末マデノ三文字分余空白、【史】

⑧【底】行末マデノ四文字分空白、【史】

⑨【底】行末マデノ三文字分余空白、【史】

⑩【底】行末マデノ四文字分余空白、【史】

⑪【底】行末マデノ三文字分余空白、【史】

⑫【史】空白ナシ

⑬【底】行末マデノ四文字分余空白、【史】

⑭【底】行末マデノ四文字分余空白、【史】□□□

年之榮、堅節貞姿不撓直、冒霜傍^①

青、視聽之訢觸、誰以不惑觀、既而、歌堂燭徹、^④

奏鈞天之正声、宴閣漏移、愛余湛露之清酌、群^⑤

僚僉拜稽首而曰、軒皇之作咸池也、雖曠古之^⑦

樂至治之旨猶今、衛俗之詠淇澳也、雖變風之詩^⑧

美盛之容仍旧、長遠、幸辱勅撰、初備題者序者、一^⑨

頗以庸才、不恥先祖列祖、庶察喜懼、曲垂恩慈云爾、^⑩

万竿竹表万年齡 霜後存貞高節青^⑪

鸞集鳳來歸 聖化 歛遊可識德風馨^⑫

賦竹有万年色 詩以青為^⑬

重陰簇々蓋瑤庭 宜夏耐寒呈綠青^⑭

万歳瑞威無若竹 龍吟曲裏憶柯亭^⑮

冬日同詠竹有万年色 應 製詩一一^⑯

関白從一位臣藤原朝臣経嗣上^⑰

脩竹利貞含地靈 霜前雪後却添青^⑱

万年 仙賞初歛日 頌詠時哉盛德形^⑲

冬日侍 太上皇仙洞同賦、一一、一一^⑳

從一位行大納言臣藤原朝臣重光上^㉑

鸞鳳來儀 聖德寧 仙遊記得万年齡^㉒

好陪歛宴聽歌吹 玉砌霄寒竹色青

①【底】行末マデノ四文字分余空白、【史】□□□

②「觸」、【底】字形微妙ニ異ナルモ、【史】釈文及ビ文意ニ從ヘリ

③【史】歛^{歛カ}

④【底】行末マデノ一文字分空白、【史】□

⑤【小】「端欠」トシテ、冒頭ヨリ「宴閣」マデヲ闕ク

⑥【小】爰

⑦【史】曠、【小】曠^{曠カ}

⑧【小】盲^{盲カ}

⑨【史】喜^{喜カ}

⑩【史】詩ヲスベテ一字下ゲトス

⑪【史・小】空白ナシ

⑫【高】空白一文字分、【史】空白ナシ、【小】「色」ノ次改行ス

⑬【史】空白ナシ、【小】「應」ノ次改行ス

⑭【史】製^{制、以下同シ}

⑮【小】為^{以青}誤

⑯【小】「同」ヲ「三行三字也」ニ作ル

⑰【史・小】空白ナシ

⑱【史・小】空白ナシ

⑲【小】竹有万年色應ノ太上皇製詩^{以青}誤

⑳【小】「同」ヲ「三行三字也」ニ作ル

㉑【史・小】空白ナシ

冬日陪^① 仙洞同^② 一応^③ 太上皇製^④、――

正二位行陸奥出羽按察使臣藤原朝臣兼長上

新開御讌^④ 仙庭 徳合天心耀日星

好是竹竿剛直節 令棲祥鳳万年青

以下同^⑤ 從二位臣藤原朝臣家房上

喜哉四海日清寧 大化滂流聖徳馨^⑦ 二

貞節^⑧ 万年惟在竹 幾凌霜雪自青々

冬日侍^⑨、――一首 二行

從二位行兵部卿臣菅原朝臣長敏上

脩竹万年生^⑩ 御庭 風前奏曲列瑤青

平安声頌此君徳 天以清兮地以寧

冬日陪^⑪、――詩 二行

藏人頭正四位上行左中弁臣藤原朝臣家俊上

鴛行夙夜^⑫ 朝廷 勁直万年霜竹青

御讌今廣詔樂曲 蓬萊宮裏祝遐齡

冬日侍^⑬、――一首

正四位下行大學頭兼文章博士土佐介臣菅原朝臣長方上

聖代瑞光清政庭 鳳凰來処竹青々

歲寒添得貞堅色 新拜^⑭ 仙遊祝万齡

冬日侍^⑮、――

藏人正五位上行右。弁臣藤原朝臣時房上

射山祝得南山寿 亦是万年宮竹青

今夜^⑯ 仙遊無限興 可知來鳳復堯庭

①【史・小】空白ナシ

②【小】「同」以下ヲ「賦竹有万年色応／太上皇製詩緜讀」ニ作ル

③【史】空白ナシ

④【小】「同」ヲ「三行三字也」ニ作ル

⑤【史・小】空白ナシ

⑥【小】「以下同」ヲ「冬日陪、――、詩ハハハ」ニ作ル

⑦【書・小】「二行也」ナシ

⑧【史・小】「二行」ナシ

⑨【史・小】空白ナシ

⑩【史・小】「二行」ト注記アリ

⑪【史・小】空白ナシ

⑫【小】同侍

⑬【小】「同」ヲ「二行」ニ作ル

⑭【史・小】空白ナシ

⑮【小】「同」ヲ「二行」ニ作ル

⑯【史・小】空白ナシ

同前^① 藏人正五位下行左衛門佐臣藤原朝臣經興上

仙園竹祝万年齡 玉立亭々帶雪青^{同②}

鳴鳳定応枝上宿 管絃更入九韻聽^③ 三

從五位下守治部權大輔臣菅原朝臣為清上^④

万年喜運生脩竹 独向寒前別樣青^⑤

宸宴新看来鳳瑞 篩金戛玉滿仙庭^⑥

題者大藏卿^⑦

読師一位大納言

応永十九年十二月九日詩御会講師家俊^⑧

御製読師閑白^⑨

講師大藏卿

(二行分空白)

(一面空白) 一四

冬日侍^⑩ 太上皇仙洞同詠松遐

年友応^⑪ 製和歌一首并序

從一位行大納言臣藤原朝臣重光上

夫蓬萊洞之^⑫ 仙室者、桃花坊之名区也、瓊樹

玉池之遶砌、壺中景象垣然可觀、奇巖恠

石之当牕、方外風流忽焉在前、^⑬

太上皇謝^⑭ 宸居兮幾日、猶咫^⑮ 九禁求庶

績詢政之余暇、開^⑯ 叡賞何時、粵延百僚

試群才応^⑰ 製之新辭、方今、松影鬱^⑱ 葱迎

千載之佳氣、雪花續粉、幾十回之栄也、移風^⑲

易俗無悛焉、久騰絶妙神詠於住吉岸、暑^⑳

①【小】「同前」ヲ「冬日侍」ノ、「玉立」ニ作ル

②【小】「同」ヲ「二行」ニ作ル

③【小】韻^(マ)

④【小】冬日侍、一ノ、一ノ、一ノ

⑤【小】「二行」ト注記アリ

⑥【小】色

⑦【小】全^(マ)

⑧「応永」御会、「史」「題者大藏卿」ノ前行ニ置ケリ

⑨【小】「御製」ナシ

⑩【史・小】空白ナシ

⑪【史・小】空白ナシ

⑫【史・小】空白ナシ

⑬【史】垣、^(マ)【小】垣

⑭【小】忽^(マ)

⑮【史・小】空白ナシ

⑯【史・小】空白ナシ

⑰【史・小】空白ナシ

⑱【史・小】葱、^(マ)【小】葱

⑳【史】也^(光)

往寒来不凋矣、遐約長生仙齡於姑射山、何

矧、^② 聖皇之調天曲也、理世之音洋々、賢佐之

陪夜宴也、明時之郁々盛集之美、何以加旃、重

光、苟垂三台相位、既極一品崇班、數辱^④ 詔命、不

知群辭、猥獻題目、贖膺唱首、匪啻^⑤ 叡才之

招傍嘲、恐亦榮分之超先例、不勝感情、耶^⑦

雅興、其詞曰、

いくちよも君ならて又たれかみむ する人そしる松のゆくすゑ^⑧ 五

詠松遐年友和歌^⑧

さら^⑨にいまよろつとしとやよはふらん はこやのやまのみねのまつかせ
めくみそふ君にあひおひの松なれば 千とせのゝちも万代やへん

冬日同詠松遐年友応^⑩ 製和歌

関白従一位臣藤原朝臣経嗣上

いまよりは君をちとせのしる人と はこやのやまの松やおもはむ

冬日同詠松遐年友応^⑪ 太上皇製和歌^⑫

正二位行権大納言臣藤原朝臣実永上

さらにまた君こそなれめまつか枝の かはらぬ色の千世のゆくすゑ

冬日侍太上皇仙洞同詠松遐年友応^⑬ 製和歌

正二位行権大納言臣源朝臣通宣上

わかきみのともとみきりのまつかえは いくちよおなしかけをならへむ

同^⑭ 正二位行権大納言臣藤原朝臣兼宣上

さらに又めくみやそはんいまよりの きみか千とせをまつに契て^⑮ 六
同^⑯ 従二位行権中納言兼民部卿臣藤原朝臣為尹上

①【小】復

②【史・小】空白ナシ

③【高・史・小】之文

④【史・小】空白ナシ

⑤【史】群辭【小】拝

⑥【小】□才

⑦【史】耶

⑧【小】「和歌」ヲ改行ス

⑨【小】「女房」ヲ「女房散書」ニ作ル

⑩【史】空白ナシ、【小】「応」ニテ改行ス

⑪【史】空白ナシ、【小】「応」ニテ改行ス

⑫【小】「皇製」ヲ「皇製」ニ作ル

⑬【小】「年」以下改行ス

⑭【小】「応製」ヲ「応製」ニ作ル

⑮【小】冬日侍太上皇仙洞同詠松／遐年友応 製和歌

⑯【小】言藤^{臣職}

ときはなるまつの千とせもいさゝらは みなそへをかんきみか行すゑ^①
同^② 従二位行権中納言兼太宰権帥臣藤原朝臣公雅上

めくみそふきみにちきりて今日よりや みきりのまつも千世をかさねん
同^③ 従二位臣藤原朝臣公種上

君そみん木たかきまつのゆくすゑも ちよにやちよを猶かさねつゝ^④
正四位下行侍従臣藤原朝臣為盛上

君か代のかきりしらねは千とせとも いはてそ松に契りをかまし^⑤
従四位上行左近衛権中将臣藤原朝臣雅清上

高砂のまつをつくしてちきるとも なを君か代の数はかきらし^⑥
正五位下行右兵衛佐臣藤原朝臣藤光上

よろつ代もあかぬこゝろやしるからし 松ときみとのおなしちきりに^⑦
正五位下行左衛門佐臣藤原朝臣盛光上

君かすむはこやの山のまつか枝に「七 とをき千とせをなをやちきらん
題者一位大納言

読師一位大納言

⑧ 応永十九年十二月九日和歌御会 読師盛光

御製読師一位大納言

講師民部卿

(二行分空白)

御遊

拍子 綾小路宰相

付歌 資興

笙 御所作在之 花山院大納言

箏 前左兵衛督

①【小】うへ

②【小】冬日侍太上皇仙洞同詠／松遐年友応 製和歌

③【小】冬日侍太上皇仙洞同詠松遐／年友応 製和歌

④【小】冬日侍太上皇仙洞同詠／松遐年友応 製和歌

⑤【小】冬日侍太上皇仙洞同詠／松遐年友応 製和歌

⑥【小】端作同前

⑦【小】冬日侍太上皇仙洞同詠松／遐年友応 製和歌

⑧「応永〳御会」、【史】「題者一位大納言」ノ前行ニ置ケリ

笛 大炊御門前宰相中将

琵琶 左大臣

箏 新宰相中将^① 季保

和琴 大炊御門中納言

呂^二八

安名尊 鳥破 席田 鳥急 賀殿急

律

万歳楽 伊勢海 三台急

【略解題】

本詩歌会に関しては、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』（風間書房、一九八四・六）に、以下の言及がある。

この年（〓応永十九年）……天皇（〓後小松）は……十二月九日仙洞三席御会を行つた。常永入道記及び公宴部類記所収経嗣記〓荒暦に詳しく記されているが、詠草は「詩歌晴御会」（高松宮・書陵部蔵。共に「玄恵追悼詩歌」と合綴……）という一書として残存する。序者は菅原長遠、御製講師は為尹、作者は現在の公卿殿上人である。（五八頁）

十二月9 仙洞三席御会（書陵部・高松宮）詩「竹有万年色」、歌「松遐年友」詩序は東坊城長遠、作者経嗣以下。和歌の序者は重光。歌人、御製・女房・経嗣・実永・通宣・兼宣・為尹・公雅・公種・為盛・雅清・藤光・盛光（五八〇頁）

また、『大日本史料』第七編之十七には、『荒暦』『常永入道記』『山科

①【史・小】空白ナシ

家礼記』『高松宮御所蔵文書』『御遊抄』『教興卿記』を引く。

一条経嗣『荒暦』の記事が最も詳細であるので、専ら同記によりつつ、作者等を注記しておく。

- 詩歌奉行……………甘露寺清長
- 詩頭……………清閑寺家俊
- 和歌頭……………日野西盛光
- 詩題者……………東坊城長遠
- 詩読師……………日野重光
- 詩講師……………清閑寺家俊
- 詩御製読師……………一条経嗣
- 詩御製講師……………東坊城長遠
- 和歌題者……………日野重光
- 和歌読師……………日野重光

和歌講師……………日野西盛光

和歌御製読師……………日野重光

和歌御製講師……………冷泉為尹

〔詩人〕※詩序Ⅱ東坊城長遠

後小松院

一条経嗣・日野重光・甘露寺兼長・吉田家房・五条長敏・清閑寺家

俊・菅原長方・万里小路時房・勸修寺経興・五条為清

〔歌人〕※歌序Ⅱ日野重光

後小松院

一条経嗣・日野重光・西園寺実永・久我通宣・広橋兼宣・冷泉為尹

・正親町三条公雅・小倉公種・八条為盛・飛鳥井雅清・日野町藤光

・日野西盛光

〔御遊所作人〕

拍子……………綾小路信俊

付歌……………綾小路資興

笙……………後小松天皇〔御所作在之〕とあり〕十花山院忠定

箏……………楊梅兼邦

笛……………大炊御門信経

琵琶……………今出川公行

箏……………正親町実秀十四辻季保

和琴……………大炊御門宗氏

*「御所作笙云々」〔薩戒記〕、「笙御新懸」〔御遊抄〕とあり、

本書の記事が裏付けられる。

○

本詩歌会の伝本に関しては、前掲井上論に簡単な言及があるが、管見に入つたのは、以下の五本である。

- ①宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『詩詠晴御会』(二一〇・七一五)所収本
小論の底本。一冊。「函架番号」二一〇・七一五「装訂」袋綴装。「法
量」縦二七・八×横二〇・二cm。「表紙」水色地に、青色波紋刷文
様。「外題」詩詠晴御會應永十九(原・左・簽・書「朱短冊、一七
・二×三・四cm)。「内題」ナシ「本文」一面八〇行、和歌一首
二行書。「紙数」首尾に遊紙が各一丁置かれる。墨付二〇丁。本詩
歌会は前半の九丁。後半の一丁は『玄恵法印追善和歌』。「蔵書印」
墨付第一丁表右上に「宮内省／圖書印」(方朱印、単郭、陽刻)一
顆あり。「書写者、書写年代」江戸後期写。
- ②宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『詩歌晴御会』(二一〇・七五二)所収本
一冊。「函架番号」二一〇・七五二「装訂」袋綴装(五つ目)。「法
量」縦二六・八×横一九・八cm。「表紙」薄黄土色無地。「外題」な
し「内題」詩詠晴御會應永十九(扉題、首部遊紙表)「本文」一面
八〇行、和歌一首二行書。「紙数」首尾に遊紙が各一丁置かれ
る。墨付二〇丁。本詩歌会は前半の九丁。後半の一丁は『玄恵法
印追善和歌』。「料紙」楮紙。「蔵書印」墨付第一丁表右上に「宮内
省／圖書印」(方朱印、単郭、陽刻)一顆あり。「書写者、書写年代」
江戸後期写。

- ③国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『詩詠晴御会』(H一六〇〇・三三
八)所収本

『国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」高松宮家伝来禁裏本目録
「分類目録編」(二〇〇九・三)及び紙焼により、書誌を記載する。

一冊。「函架番号」H一六〇〇―三三八「装訂」袋綴装。「法量」縦二八・三×横二〇・四cm。「表紙」打曇水玉文。「外題」詩誦晴御会帖十九十二九「内題」なし。「本文」一面八〜一〇行、和歌一首二行書。「紙数」全三二丁（内、首尾に遊紙各一丁）。「備考」他に二種の歌会を合綴。（一）はいはゆる『玄恵法印追善和歌』（二）はいはゆる『金剛経経旨和歌』（文安元年秋か）、「詠法会因由分和歌 関白持通」以下、但し後欠。「書写者、書写年代」江戸前期歟。

④『大日本史料』第七編之十七所掲本

応永十九年十二月九日条に引かれる。「高松宮御所蔵文書」詩歌晴御會帖十九十二九」とあり、③の積文と考へられる。ただしその積文には、必ずしも原本に忠実とはいへない部分がされる。また校訂と見做しうる箇所も存する。小論であへて校合結果を掲出した所である。

⑤『後小松天皇実録』所掲「応永十九年十二月御会詩歌」本

『後小松天皇実録』に底本に関する記載がなく、未詳とする他ない。校異からも推されるやうに、現存伝本①〜③とは明らかに異なる本文を有し、あるいは、原本そのものかとも思はれる。

○

③の積文である④を除き、残り四本の関係を考察してみたい。

まづ①②であるが、本文はもとより、一面行数、字母に至るまでほぼ全く一致するところから考へると、親子関係か兄弟関係にあると推定される。

結論だけを述べれば、兄弟ではなく親子と見做すべきだらうと考へる。その一つの証左として、蠹蝕跡の模写部分を比較してみよう。

①（二一〇・七一五）



②（二一〇・七五二）



このやうに、蠹蝕跡の模写がほぼ一致する。同一親本（原本か、原本の蠹蝕を模写した転写本かはとしないとして）を忠実に模写した場合でも、かかる一致はありうるだらうが、それよりはむしろ、どちらかがどちらかを模写したと考へる方が、蓋然性が高からうと判断する。

次に、①②と③を考へてみる。この三本は、本文が極めて近しく、また、字母等もほぼ一致するので、親子か兄弟かといった関係がまづは想定される。しかし仔細に見ると、①②と③は、親子の関係ではなく、兄弟本と見るべきであると考へる。根拠を二点あげておかう。

十國

まづ先に掲出した①②の蠹蝕跡模写部分と同じ箇所を③で見ると、となつてゐて、①②と形は近似するものの、微妙な違ひを見せてゐる。

また、和歌の序の内、①②が「明時之郁々盛集之美」に作ることを、③は「明時之文郁々盛集之美」に作る。後述する⑤も「明時之文」に作るので、ここは、①②の闕脱と見做し得よう。

以上二点を以て、①②と③は親子ではなく、兄弟本と結論づけたい。

①②と③の共通する親本について、少しく考へを述べてみたい。これも結論を先に述べれば、詩歌会の原本ではなく、一転写（乃至模写）本であつたらうと思ふ。それは、①②③が『玄恵法印追善和歌』を合綴（乃至合写）してゐるからである。恐らく、「応永十八年十二月九日仙洞三席御会」と『玄恵法印追善和歌』を合綴（乃至合写）した一伝本があり、それが二回にわたつて忠実に転写された、といふのが実情だつたらうと

踏む。親本に合綴（乃至合写）されてゐた「応永十八年十二月九日仙洞三席御会」の親本が、本詩歌会の原本であつたどうか、それはもはや知る術がない（蠹蝕・破損があれほどまでに進んでゐたことを鑑みれば、原本かとは推されるが）。

○

さて残された⑤を考へてみたい。⑤の特徴を整理してみると、

(1) 大きな前闕が存する。

(2) 歌題の改行で原初的な形を保存してゐる箇所がある。

(3) ①②③で「同」と省略されてゐる歌題の多くが、省略されず正しく

記載されてゐる。

などの点があげられよう。これらの諸点から自動的に想像されることは、⑤こそが、本詩歌会の原本（消極的にいへばその忠実な転写本）そのものではないか、との推論である。

(1)は、①②③の親本の段階で進んでゐた破損が、時を経て更に進んだ結果と見做し得ようし、(2)(3)は、①②③の親本の書写者の“手抜き”を、はからずも指し示すことになつた。このやうなことを総合的に鑑みれば、⑤を本詩歌会の原本（乃至その忠実な転写本）と想定しても良いと思ふのである。

従つて、本詩歌会の本文は、⑤を第一資料とし、①②③を補完的資料として校訂されるべきなのであるが、既述の通り、⑤に大きな前闕があること、また⑤の本文を知りうる唯一の資料である『後小松天皇実録』の積文に、いま一つ信頼性がないこと、などの理由により、小論では、

①を底本とし、②③⑤の校異を掲出することにした次第である。

（積文Ⅱ武井・酒井、略解題Ⅱ武井）